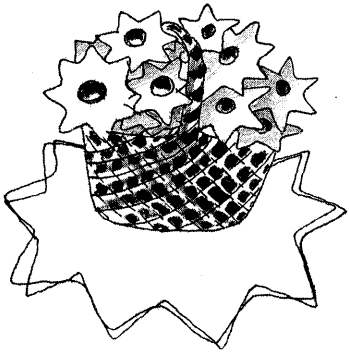
ヨーロッパ絵画にみる幼児発見の系譜とその背景(2)

～ルネッサンスからロマン主義まで～

藤田　博子



Ⅱ．イタリア・ルネッサンスの終焉

十月号で述べたように、人間自然に目を向け、調和、均衡、現実の理想化、完璧さを希求するルネッサンス絵画は、一五〇〇年頃完成し尽くし、あまりにも啓蒙的な楽天的形式主義に陥ってしまうのである。それは本来のヒューマニズムの精神から逸脱してしまう結果となった。時あたかも、これまで繁栄の絶頂にあった商業都市は凋落の兆しを見せ始めていた。そして、それに追い討ちをかけるかのように蔓延し始めた黒死病（ペスト）の流行は、この社会の人々に大きな転換をもたらしていた。一切の非合理なるものを廃し、人間を世界の中心に据え、人間を万物の尺度としてきたルネッサンス人ではあったが、なんぴとも自分の生命の有限を痛いほど知っていた。人々は次第に人間のはかなさと自己の限界を痛感しはじめ、人々の関心は公共を離れて、私的生活と隠遁生活、宗教への帰依へと移っていく。この時代のメディチ家の当主ロレンツォ・デ・メディチ（Lorenzo de Medici, 1449－92）は人生をこのように歌っている。

うるわしの青春もあわれはかなし
人よ、今宵を楽しまん

明日ありと定めがたければ
それはメディチ家の凋落、ひいてはフィレンツェの、イタリア・ルネッサンスの終焉を予言する歌でもあった。人々は憂愁に満ちた面持ちで、そこはかとないもののあわれみをかみしめはじめる。

サヴォナローラ（Girolamo Savonarola, 1452－98）が出現したのはこうした時期であった。当時、フィレンツェのサン・マルコ修道院の説教僧であった彼は、一四九四年から九八年にかけて、メディチ家の治下のフィレンツェ社会の爛熟や教会の堕落を痛烈に攻撃し、再度にわたり「虚栄の焼却」を行い、美術品を火に投じたのであった。サヴォナローラは聖母子画に対して、彼の宗教観からひとつの要請をうちたてた。「聖母は単におさな子の母ではなく、全人類の母であり、救い主の母である。それゆえ、聖母子画においては、聖母はおさな子を膝において愛撫したり、頬擦りしたり、胸を露にはだけたりする人間的、世俗的な表現であってはならない。」というものであった。サヴォナローラの要請にしたがって、その後、聖母子画は、これまでの世俗的日常性や人間自然への愛から離れ、ラファエルロを代表とする、楽天的形式主義、硬直した古典主義に陥っていくのである。幼児期の発達にふさわしいしぐさを許されていた絵の中のおさな子たちは、聖書の寓意にかなった姿勢で描

◀13 ラファエルロ『美しき女庭師』

かれはじめ、神の子としての象徴で装われる。その典型が、写真―13のラファエルロ（Raffaello Sanzio, 1483―1520）『美しき女庭師』一五〇七年作である。神のおさな子は躍動する肉体をそなえつつも、自然から隔離され、遮蔽園（パラダイス）のなかにいる。これを機として、イタリア・ルネッサンスは終焉をむかえるのである。

◀14 ブロンツィーノ
『エレオノーラ・ディ・トレードとその息子』

しかし、一方では人間の有限の自覚のなかで、より永遠なるものへの希求から、さらに古代ギリシアへの憧憬がわきおこり古典研究も盛んになる。ミケランジェロは、ラファエルロ的な楽天的形式主義の沈着冷静な完璧さをうち破り、マニエリスム様式をうちたて、やがて激しい命の躍動をダイナミックな表現力で謳歌するバロック主義の基礎を固めていくのである。写真―14はマニエリスムを代表とする画家、ブロンツィーノ（Bronzino, 1532―72）の『エレオノーラ・ディ・トレードとその息子』である。宗教画をまったく離れ、現実の母と子の姿が生き生きと描かれている。

Ⅲ．北方ルネッサンスとマニエリスム

1．ネーデルランド＝フランドル・ルネッサンス

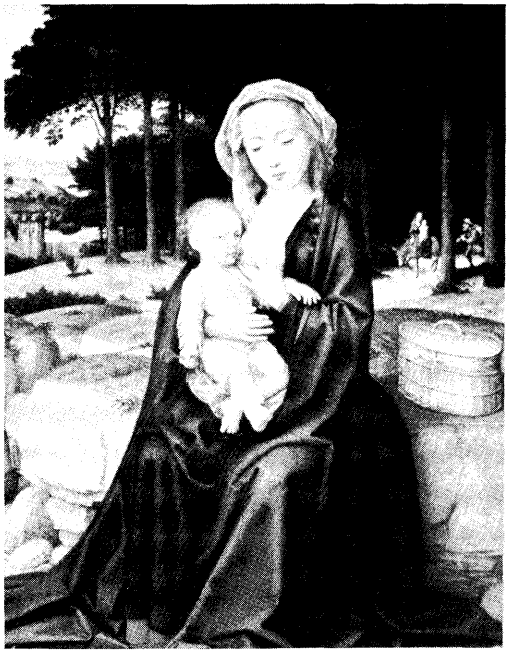
イタリアにおいてヒューマニズムがその人間的な本来の姿を失いつつあるころ、ルネッサンス・ヒューマニズ

ムはアルプス以北で、ルネッサンス最大の学者エラスムス（Desiderius Erasmus von Rotterdam, 1469？－1536）とともに、さらに普遍的で広範な活動へと新たに発足しつつあった。エラスムスはクインティリアヌス（Marcus Fabius Quintilianus, 30/45－100）やプルタルコス（Plutarchos, 46?－120）など古代教育論者のヒューマニズムをモデルと仰いで、自己自身の自然的諸能力を陶冶し、より人間的な生活をめざす、より人間的な人間の形成を提唱した。教育万能主義の彼は、「教育はすべてを克服する。Educatio vincit omnia」と高唱し、人間には他の動物と違って理性（ratio）が内在しているという人間観にたって、教育とは、このratioがもっている向上的な力を開発することである、教育が正しくおこなわれれば人間は正しく形成される。という教育観をうちたて、こうした人間観、教育観から啓蒙書『児童自由教育について』を著し、子どもの教育には全く無関心な親たちに、人間存在における幼少期の教育の必要性と可能性について説いた。彼は人生の各段階を四季に譬え、教育の適時と教育法、教材の選択を提唱し、特に幼児期には、教授を競技化し、遊戯化し、童話などを通して笑いのなかで、楽しいもの、美しいもの、愛すべきものに触れさせることこそ重要であると説いた。彼の遊戯の重視は、「遊戯は子どもにおいては人間発達の最高の表現である」といった、ドイツ・ロマン主義教育者、フレーベル（Friedrich Fröbel, 1782－1852）に先

◀15　ワイデン

立つこと三〇〇年の卓越した見識であった。彼が幼児の遊戯を重視し、中世以来の過酷な鞭打ちを廃止した背景には、児童観の変換があるといえよう。中世以来、子どものからだの中には悪が巣くっていると信じられてきた。それゆえ、それを鞭で叩き出すのが教育だと信じられてきた。エラスムスはこうした子ども性悪説を廃し、

◀16 ゴッサート



▶17 ダヴィド

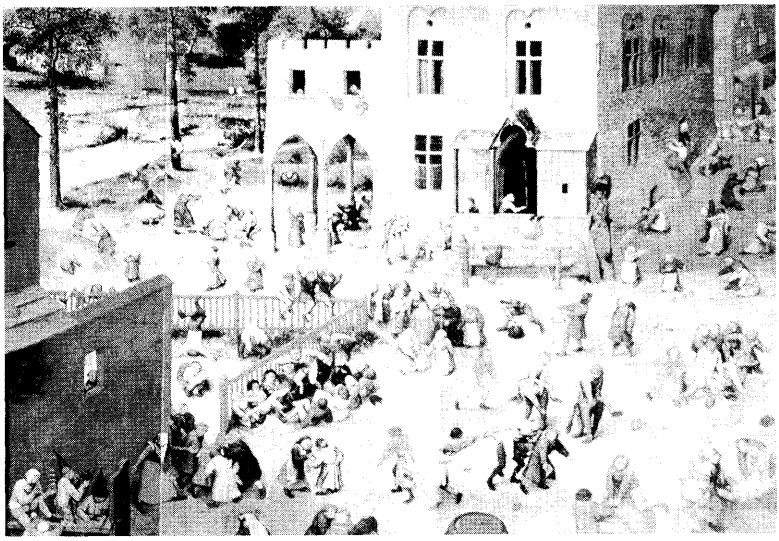
真の人間、真の子どもの発見に立脚して、自由人にふさわしい愛情をもって子どもたちを楽しく学習させようとしたのであった。

絵画について言えば、アルプス以北の国々はラファエルロを代表とする盛期ルネッサンスの硬直した古典主義

▶18　オルレイ

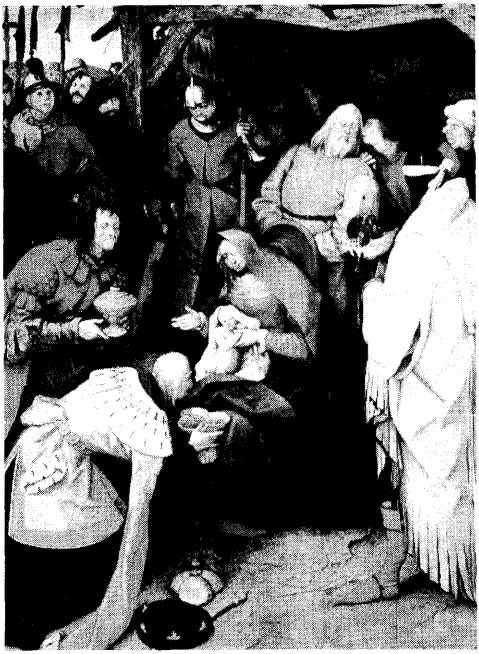
の洗礼を受けること無く、ゴシックから直接マニエリスムに移行した。この時代を代表する画家にワイデン（Van Der Weyden, 1399－1464）写真－15、ゴッサート（Jan Gossart, 1478－1533）写真－16、ダヴィド（Gerard David, 1450－1523）写真－17、オルレイ（Von Orley, 1492－1542）写真－18、がいる。これらの聖母子画のなかの母たちは、授乳にふさわしいデザインの衣をまとい、祈禱書や連珠までみどり児に弄ばせ、母たる至福にひたっている。写真－16など、当時としては大変高価であり、神聖であったはずの祈禱書をみどり児に踏み躙らせてさえいる。みどり児は片手を母の首に、頬を母の頬へおしつけながら、もう一方の手には「創世記」の禁断の果実を握っている。それらはあたかも、立法よりは愛を、因習（ノモス）よりも自然的（ピュシス）なるものを重視ないし優先しようとする動きであり、渇望であるととれよう。写真－18の聖母は祈禱書から身をそらし、連珠をみどり児に弄ばせ、片手には果実を示している。「人はパンのみに生くるにあらず、それは神のみことばによりて生くるなり……否否、果実の甘さによりて生くるなり。」と言っているようである。

さらに、子どもの遊びを重視したネーデルランドの画家に、ブリューゲル（Pieter Bruegel, 1528？－69）が



▶19 ブリューゲル『こどもの遊び』

いる。彼は、宗教画を離れて庶民の子どもたちを描いた画家の草分けでもある。写真－19は、有名な『こどもの遊び』と題する絵である。百種類に近い当時の子どもたちの遊びが描かれている。子どもの数はその数倍である。農民社会そのものに取材したこの絵には、ヒューマニズムの精神があふれ、ひとりひとりの子どもの遊びに



◀20 ブリューゲル『聖母子』

深い愛情がそそがれている。この子どもの遊びの尊重も、イタリア・ルネッサンスを経由してやってきた古代ギリシアの思想であるとともに、エラスムスの競技・遊戯の重視の流れを汲むものであろう。ブリューゲル自身もイタリアに遊学し、ヒューマニズムの洗礼を受けている。写真―20も、同じくブリューゲルの『聖母子』である。神の子は丸裸で、人間の赤子そのままに怯えている。聖母も貧しいひとりの母であり、母子ともによるべない思いに満ちている。丸裸で生まれて来ようとも、ratio を包み持って生まれてきた人の子は、神のごとく天上的な存在に自己教育でもって向上できるのである。

◀21 ヴァン・ダイク『貴婦人とその娘の肖像』

▶22 ヴァン・ダイク『ロメリ侯爵夫人と子どもたち』

授かった理性をいかに向上的に活用するか、この選択の自由に人間の尊厳はかかっているのである。この自由を正しく行使するとき、人は神以上の存在になれるのである、とでも言いたそうである。

写真－21『貴婦人とその娘の肖像』、写真－22『ロメリ侯爵夫人と子どもたち』はともにヴァン・ダイク（Anthonis van Dyck, 1599－1642）の作によるものである。貴族の婦人の肖像画に脇役として子どもが登場してくる。子どもたちは年齢にふさわしい愛らしさで描かれつつも、内面にひそめもつ ratio ゆえに誇らかな輝きを

▶23 ルーベンス『みどり児の聖母』

▶24 ルーベンス『ねむるみどり児』

▶25　ルーベンス『みどり児』

放っている。写真－23は、レオナルド・ダ・ヴィンチの作品から多くを学んだルーベンス（Peter Paul Rubens, 1577－1640）の『みどり児の聖母』である。ルーベンスは末期ルネッサンスの形式主義の反動として興ったバロック主義の巨匠である。みどり児たちの百態のしぐさが、生き生きとした解剖学的肉付きで、実に美しく、愛らしく描かれている。まさに、みどり児礼讃のめくるめく乱舞の渦であり、生命の謳歌そのものである。しかも、裸のみどり児のなかには女児も混じっている。写真－24、写真－25も同じく、ルーベンスの『ねむるみどり児』と『みどり児』の頭部である。いずれも、みど

◀26　レンブラント『ガニュメテス』

り児の肌の温もりと寝息まで伝わってきそうな絵である。この時代いかに幼児が男女を問わずその存在を尊重されていたかがうかがえる。華麗な色彩と力強い筆致は、後のロマン主義に多大な影響を与えることとなる。

写真－26はレンブラント（Rembrandt van Rijn, 1606－69）の『ガニュメデス』である。寓意的ではあるが、恐怖に泣き叫ぶ幼児が、実に写実的な筆致で描かれている。

写真－27も同じくレンブラントの『家族の肖像画』である。やっと子どもが中央に描かれるようになる。それは、幼児が社会のなかでまっとうな位置を与えられたことを示すものであるといえよう。

――つづく――

（浪速短期大学）

▲27　レンブラント『家族の肖像画』